

原始ゲルマン民族の国家制度と法律思想 に関する一考察

三 喜 田 熊 蔵

序

ゲルマン民族は現代のヨーロッパ文化及びアメリカ文化の担い手であり、中世及びルネサンス文化は彼等によつて成就せられたのである。然るにその原始時代の文化は最近まで余りにも研究されて居ない。ギリシアやローマの文化は死滅した民族の文化でありながら早くから研究されて居り、その他の埃及やクレテ文化でさえ比較的明かにされて居るのに原始ゲルマン文化の研究は比較的小くから始まつて居る。その主な理由はキリスト教との関係にあると思われる。キリスト教はギリシア文化を摂取しギリシア哲学をかりて自己の神学を説明した。又ローマ教会はラテン語を教会用語として採用したためにギリシア、ローマ文化は異教文化でありながら教会によつて尊重せられ保存せられた。然るにローマ教会はローマ社会に侵入したゲルマン民族に対して徹底的な教化的態度をとり、彼等の固有の文化を退けた。ルネサンス文化はゲルマン文化の台木にキリスト文化を接木して咲かせた美花であつたに拘らず、ルネサンスの人文主義者達はゲルマン人を野蛮人として軽視し、ひたすらギリシア、ローマ文化の崇拜に終始した。

このゲルマン文化の価値を見出して来たのは十九世紀のロマンティシズムとこれに伴う歴史主義の賜である。かくして、ゲルマン文化に関する名著が次ぎ次ぎと世に送られて来た。

Karl Müllenhoff, Die Deutsche Altertumskunde. 1870-91.

Jacob Grimm, Deutsche Rechtaltertümer. 1828.

„ Deutsche Mythologie. 1835.

Wilhelm Grimm, Deutsche Heldensage. 1829.

K. Schumacher, Siedlungs und Kulturgeschichte der Rheinland.

(1) Die Vorrömische Zeit. 1921.

(2) Die Römische Zeit. 1923.

(3) Die Merowingische und Karolingische Zeit. 1925.

E. Norden, Die germanische Urgeschichte in Tacitus' Germania. 1922.

G. Neckel, Altgermanische Kultur. 1925.

„ Germanen und Kelten. 1929.

L. Wolff, Die Helden der Völkerwanderungszeit. 1928.

F.R. Schröder, Germanentum und Hellenismus. 1924.

„ Altgermanische Kulturproblem. 1929.

„ Lehrbuch der deutsche Rechtsgeschichte.

P. Hermann, *Altdeutsche Kultgebräuch.* 1928.

R. Mielke, *Das deutsche Dorf.* 1913.

A. Dopsch, *Wirtschaft und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung aus der Zeit von Cäsar bis auf Karl den Großen.* 1923-24.

H. Fehr, *Deutsche Rechtsgeschichte.* 1921.

以上はその主なるものであるが、この原始ゲルマン民族の研究の史料となるものには第一に彼等が使用した Runen 文字の刻せられた記念碑がある。これは 大体 1000 B. C. -1200 A. D. に亘つて製作せられ現代は Skandinavia の山地から Dänemark, 英国等に広く残存して居るが、その文字は神秘的、魔術的意義を持つて居たためキリスト教の伝播と共に亡び去つてその研究も現代余り進んでいない。

次にギリシア人、ローマ人の手になつた文献には、非常に貴重なものが多い。Alexander 大帝と同時代の人で、Elbe 河口から Britannia 地方を旅行した Pytheas von Massilia の旅行記には Germania の地誌が含まれて居る。又 Rome の皇帝 Claudius (在位, 41-54 A. D.) と同時代の地理学者 Pomponius Mela の著した *De Situ Orbis* (世界地誌) にも Germanina の記事が記載されて居る。

又小アジアの Pontus に生れた Strabon (c. 55 B. C. -25 A. D.) の地誌にも Germania に関する記録が包含されて居る。

更に Julius Caesar (100-44 B. C.) の有名な *Commentarii de Bello Gallico* は Caesar が 58-51 B. C. に亘つて Gallia を遠征し、58-52 年迄毎年 1 巻ずつ 7 巻として著したものであるが、この Gallia 戦記は原始ゲルマン人の国家、政治、軍隊、風俗、地誌に関する貴重な記録である。これは敵將の眼を以て観た記録で三頭政治の一人たる Caesar のローマ民衆に対する一種のプロパガンダであるがゲルマン人に対して冷厳さを以て観察して居るだけ真実さが含まれて居る。

Verona 生れの大博物学者 Plinius the Elder (23-79 A. D.) の *Natural History* は 20,000 余の題材が取扱われて居るが、そのうちに Germania に関する記録が包含されて居る。

ローマの偉大なる歴史家の一人である Cornelius Tacitus (54-118) の著した *De Vita et Moribus Juli Agricola* (98), *Historiarum Libri* (115-116), *Annales* (115-117) 等は各れも German 研究の史料として貴重なものであるが、更に最も重要なものは彼の著 *Germania* (98) である。これは 46 章から成り、Germania の地誌、ゲルマン民族の国家、政治、軍隊、戦争と平和、奴隸制度、日常生活の風俗習慣、各々の部族の習性等豊富な内容が簡潔な文章に盛られて居る。私のこの小論文も主として Tacitus のこの *Germania* と Caesar の *Commentarii de Bello Gallico* に拠つて居る。

第 1 世紀の末から第 2 世紀の中頃にかけて生存し皇帝 Hadrian の *magister epistolarum* (秘書) となつた Gaius Suetonius の著した Augustus から Domitianus に至る皇帝列伝にもローマとの関係においてゲルマン人の記録が載せられて居る。

Neoplatonism に帰依したローマの歴史家 Ammianus Marcellinus (c. 325-391 A. D.) の著したローマ史 (*Rerum Gestarum Libri*) は 31 巻より成り、96 年から 378 年に及んで

居るが、最初の13巻は湮滅し、現存せる18巻(353-378)は原始ゲルマンに関する貴重な史料を包含して居る。

Alexandria で研究した天文学者にして地理学者の Ptolemaeus (127-151A. D. 頃生存) の著 *Almagest* にも *Germania* の地誌が包含されて居る。

第5世紀の末に *Caesaria* に生れ、527年に東ローマの將軍 *Belisarius* の秘書となつたギリシアの歴史家 *Procopius* の著した史書にも、東ローマと *Goths* との戦争の記事が載せられている。

更に *Byzanz* の歴史家 *Agathias* (c. 536-582A. D.) の552から558年に亘る *Byzanz* 人と *Goths*, *Franks*, *Vandals* との戦争の記録も *German* 民族の尊い史料である。

東ゴート王 *Theodoric* に仕へた政治家 *Cassiodorus* (c. 490-585A. D.) の著した史書にも *German* に関する史料が包含されて居る。

Tours の司教 *Gregor von Tours* のフランク史 (*Historia Francorum*) は、原始ゲルマン研究に欠くことの出来ない貴重な史料である。

Beda (672-735) の英国教会史は、*Angel Sachsen* の研究に欠くことは出来ない。

Langobarden 族の貴族の出身で *Charlemagne* の知遇を得た歴史家 *Paulus Diaconus* (c. 720-800) の *Langobarden* 史 (*Historia gentis Langobardorum*) も原始ゲルマン民族研究の史料として貴重なものである。

更に原始ゲルマン民族の研究に欠くことの出来ないものに大体西紀7世紀頃から13世紀頃に *German* 民族の手に成つた各々の部族法がある。*Lex Salica*, *Lex Ripuaria*, *Lex Alemanni*, *Lex Baiuvarum*, *Lex Visigotorum*, *Lex Burgundionum*, *Lex Chamavorum*, *Sachsenspiegel*, *Schwabenspiegel* 等の如きもので、彼等がローマに代つて西欧の支配者となつて後、実際の統治の必要上から編纂されたものである。これらの法典には多分にローマの影響が認められるが、同時に原始ゲルマン文化が保存されて居る。殊にローマの影響を受けることの比較的遅かつた北欧の部族法にはゲルマン的なものが多く残存して居るから原始ゲルマン民族の研究には実に重要な史料と言わねばならない。

I 原始ゲルマン民族の国家

a. *civitas*

原始ゲルマン民族の国家をローマ人は *civitas* と呼んだ。この *civitas* は又ローマ人によつて屢々 *gens*, *natio* と混同して用いられた。*Müllenhoff* は *Die Deutsche altertumskunde* (1862, S. 529) のなかで、この *civitas* を各々の政治的に独立した、まとまつた民族共同体 (*eine einzelne politische selbstständige und abgeschlossene Volksgemeinde*) と云つて居るが、この *civitas* は一の概念によつて表現出来ぬ程複雑な内容を持つて居る。或る時は一の部族が一の *civitas* を構成して居るが、又この部族が幾つかの *civitas* に分れたり、又多くの部族が集つた一の民族的なものが *civitas* と呼ばれることもある。概して独逸の西部には小地域の *civitas* が発生したが東部では広大な地域を支配する *civitas* が発達した。又ローマ人の *civitas* に対する考えも時代と共に變つて居る。*Caesar*

や Tacitus の時代には大体ローマの gau, 又は pagus に相当するゲルマンの共同体を civitas と呼んだ。然し Caesar の時代でも一の civitas が幾つかの pagus に分れたり、又幾つかの civitas が一の pagus を作っていることもあり得た。即ち一の村落 (vicus) が一の civitas を構成している場合が多かった。

第2世紀になるとローマには自治的組織をもつた都市が発達しローマ人はこれを civitas と呼んだ。従つてローマ人から見て、自治的な都市生活をして居るゲルマン人の共同体が civitas と呼ばれた。

第4世紀になるとキリスト教が地方へ浸透して行つたから一の司教の管轄区域、即司教区を civitas と呼んだ。ゲルマン民族がローマを征服して彼等の主権の下に国家を建設する様になつてからこの civitas は pagus (gau) に変わり、自治的組織が衰えて、国王の官吏である Graf によつて統治せられる様になつた。

従つて原始ゲルマン民族の国家は現代人の考える様な国家ではない。Caesar は Bello Gallico VI23 に、次の様に云つて居る。 „in pace nullus est communis magistratus, sed Principes regionum atque pagorum inter suos ius dicunt controversiasque minunt” (平和な時には共同の指導者 (Magistratus) がない。一地区 (regio) 又は一村 (pagus) に司法権を施行する首領 (Principes) があつて、訴訟を裁く。) この Caesar の文章の regio も村落を意味する言葉であるが、pagus よりは広く幾つかの pagus が集つて一の regio を構成する。この Caesar の文章によると German の civitas には、平和な時は共通の支配がない、幾人かの首領 (Principes) の指導下にあつて、Principes が法を施行する。

この同じことを Tacitus は Germania C. 12 に於て „Eliguntur in iisdem conciliis et Principes, qui iura per pagos vicosque reddant. centeni singulis plebe comites, concilium simul auctoritas adsunt,” (この同じ民会に於て pagus 又は vicos に法を施行する Principes が選ばれる。又それぞれの人民のうちから選ばれたる百人の扈從が咨問と権威の爲めに之を補佐する。) この Caesar と Tacitus の文章は各れも civitas の機構を説明して居り、Caesar は civitas は regio と pagus とから成つて居ると云い、Tacitus は pagus と vicus から成つて居ると云つて居る。pagus と vicus とは別なものでなく、vicus (村) は pagus の中核で幾つかの vicus が集つて pagus を構成する。又一の vicus が pagus となるものもある。この pagus は一の神社と領土と住民を持つて居り、その住民は pagani 又は cives と呼ばれた。

この原始ゲルマンの civitas は或るものは共和制を、あるものは王制を採用していた。Principes の支配下にある civitas は共和制で、rex の支配下にあるものは王制である。然しこの Principes の政治も rex の支配も根本的な相違はない。Tacitus は Germania c. 12 で、Principes は民会で選ばれることを述べて居るが、同じく Germania c. 7 においては „Reges ex nobilitate; duces virtute sumunt. Nec Regibus infinita aut libera potestas” (王は門閥により、將軍は勇氣によつて選ぶ、王にも無制限且つ自由な権限は無い) と云つて居る。即ち王も選挙によつて選ばれその権限には多大の制限を受けて居る。一の civitas には多数の Principes があつて、そのうちから pagus 及 vicus に法を施行する Principes が選ばれる。

この Principes は Tacitus が Germania c. 11 において „De minoribus rebus Principes consultant; de maioribus Omnes : ita tamen, ut ea quoque, quorum penes plebem arbitrium est, apud principes praetractentur.” (小事に関しては Principes が審議する。大事に関しては全共同体が審議する。決議権が一般民衆の側にある場合においても Principes の間において先議せられる) と云つて居る通り, civitas を代表し、之れを指導する。この Principes と相並んで rex も亦 civitas の代表者である。Germania. c. 12 において Tacitus は, „Pars multae regi, vel civitati, pars ipsi, qui vindicatur, vel propinquis eius exsolvitur.” (罰金の一部は国王 (rex) か civitas に一部は原告自身とその親戚に支払われる) と言っている様に, rex は civitas の代表者として犯罪者の支払う罰金の一部を受納する権利を持っている。従つて原始ゲルマンの civitas に於ては Principes と Rex の間には何等 根本的な相違はない。Tacitus は Germania. C. 11 において, „Mox rex, vel Principes, prout aetas cuique, prout nobilitas, prout decus bellorum, prout facundia est, audiuntur, auctoritate suadendi magis, quam iubendi potestate” (やがて rex 又は Princeps が各々其の年功, 門閥, 戦功, 雄弁によつて, 命令の力よりも説得の力によつて傾聴せられる) と云っている通り, rex と Principes は同格で, その年功, 門閥, 戦功, 雄弁によつて民衆にアピールする力が異なるのみである。

この Principes の共和制と rex の王制の相違は, 多数支配と単独支配の相違である。数人の Principes が civitas を指導する場合共和制となり, 1 人の国王が支配する場合は王制となる。この王制を採用せられる最大の原因は戦争である。Julius Caesar は Bello Gallico, VI, 23, において „cum bellum civitas aut inlatum defendit aut infert, magistratus qui ei bello praesint et vitae necisque habeant potestatem deliguntur.” (一の civitas が防禦か又は攻撃の各れかの戦争を行わんとする時に, その戦争を指導する為に生殺与奪の権を委ねられたる指導者 (magistratus) が選ばれる) と云っている。この指導者が, dux (将軍) であり, 同時に国王である。かかる rex (王) は所謂 Heerkönig 又は Heerführer である。多くの Principes のうちから dux が選ばれるが, 已に rex が存在して居る時は rex が dux となる場合が多かつたであろう。Caesar が 58-51 B. C. に Gallia を遠征した時, これに対決した Ariovist は已に 61 B. C. に Magetobriga に於て, Gallia 人を撃破し, Suebi, Harudi, Vangioni, Marcomanni 等の諸部族を併せたる大部族の王 (rex) に選出されて居た。

この Heerkönig は Indo-German 時代に起原を發した。Indogermanisch 語では Heerkönig を Korjanas と云い, 希臘語では, Koiranos と云つた。(G. Neckel, Kultur der alten Germanen. S. 59), 従つて German の王制は, 歴史的資料の残つて居る時代よりも遙か以前から始つている。

かかる王が名誉ある地位に選ばれる形式に就いて, Tacitus が Historiae, IV, 15 に記述している。それによると西暦 59 年に, Bataver, Kannifaten, Friesen 等が Rome に反抗した時, その指導者として, Kannifaten 部族の名門の出なる Brinno を楯に戴せて王に推戴した。楯にのせられることは Indogerman 語族の武人にとつては最も名誉あるものであつた。

Tacitus の時代において、多くの部族は Principes の支配下にあつたが、rex を指導者としている部族も存在した。Tacitus は Germania c. 42 において „Marcomannis Quadisque usque ad nostram memoriam reges manserunt ex gente ipsorum, nobile Marobodui et Tudri genus.” (Marcomanni と Quadi は我々の記憶の時代まで彼等自身の部族から出た王を保つていた。これらの王は Maroboduus 及び Tudrus の高貴の家から出た) と云っている。Marcomanni 族は、Böhmen 地方に居住した German の一部族で、その居住地の故を以つて Boioarii の名称をもつて歴史上に現われて来る。西暦 9 年に Maroboduus に率いられて Böhmen 地方へ移動して来た。又 Quadi は Suebi 族の一支族で、Sudeten 地方に居住していた。Tacitus の Annalen II. 62 によれば、彼等には初め Tudrus が rex となつていたが彼は間もなく Vannius によつて転覆せられた。これらの Maroboduus, Tudrus, Vannius は各れも rex (王) と dux (将軍) をかねた Heerkönig である。

又 Tacitus は Germania, C. 44 において „Eoque unus imperitat, nullis jam exceptionibus, non precario iure parendi. nec arma, ut apud ceteros Germanos, in promiscuo, sed clausa sub custode et quidem servo.” (彼等 (Suiones) のもとにおいては 1 人の王が無制限且つ絶対の權威を以つて支配している。武器は他のゲルマン人の如く一般に携帯せしめずして、収蔵し、1 人の奴隷をしてこれを監視せしめている) と云っている。Suiones 族は Schweden に居住したゲルマンの一部族で、Tacitus の時代に王政が行われていた。絶対王権のしるしとしてこの地のゲルマン族は武器の携帯が禁ぜられていると報告している。ゲルマンの自由民は平常凡て武器を帯びているので、此の部族のみがかかる武器を収蔵する風習があつたかどうか一の疑問とされて居る。Müllenhoff は Suiones のかかる風習は、Uppsala における Götterfrieden 又は Dingheiligkeit のためにその期間のみ武器の携帯を禁ぜられたのを、この祭日に丁度 Uppsala を訪ねた商人などから Tacitus はその話をきいてこれを一般的のものと思い違ひをしたのであらうと云っている。尚 Tacitus はこの外にも Gothones, Rugii, Lemovii 等の部族が王制を採用したと云っている。即ち Germania C. 43 に於て „Trans Lygios Gotones regnantur, paullo iam adductius, quam ceterae Germanorum gentes, nondum tamen supra libertatem. Protinus deinde ab Oceano Rugii, et Lemovii: Omniumque harum gentium insigne, rotunda scuta, breves gladii, et erga reges absequium. (Lygü 族の向うに Gotones 族が居る。この部族は他の German 部族よりもやや厳しい王政によつて支配されているが、自由を失う程度には達していない。尚これらに続いて大洋の近くに Rugii と Lemovii 族が居るが、これら凡ての部族の特徴は円い楯と短い剣と王権に対する服従とである) と云っている。Tacitus は王政は自由の喪失として之れを一種の墮落と見ている様である。

然しこのゲルマン民族の部族同志の戦争或は Germanen とローマ人又は Hunnen との戦いは益々鞏固なる王権を必要として各地に Heerkönig を抬頭せしめた。殊に Völkerwanderung の時代はこの傾向を助長した。かの、Suebi の王 Ariovist, Marcomanni の王 Maroboduus, Cherusci の王の Arminius, Franks の王 Clodovech, Heruli 族の王 Odoaker, Nibelungenlied で知られている Worms の Brungunden 族の王達, Westgoten

の王 Alarich, Wandalen の王 Geiserich, Ostgoten の王, Theoderich, Langobarden の王, Alboin 等, 凡て皆ゲルマンの Heerkönig である。

殊に Völkerwanderung の過程を通して部族の結合による強大なる民族が歴史の舞台に登場して来た。Franken は, Friesi, Batavi, Sugambri, Chauci, Chamavi, Cherusci, Chatti, Cugerni, Bructeri, Tencteri 等の諸部族を統合して, 強大なる国家を形成した。Bayern は Marcomanni, Quadi, Naristi, Suebi 等を統合した。Sachsen は Cherusci, Chauci, Angrivarii 等を包含して民族国家を形成した。Thüringen 族は, Angili, Hermunduri を合せた。かくの如くにして中世のゲルマン国家が発展して行くのであるが, カール大帝の大統一, 更に Otto 大帝の神聖ローマ帝国の成立以後に於ても, 独逸の領邦諸侯国は原始 German の civitas の伝統を継承していた。更にキリスト教化せられた後に於ても独逸の Eigenkirchentum には, ローマカトリック教会の統一政策に対する原始ゲルマン民族の部族的分離的傾向が見られる。

b. 貴族 (nobiles)

原始ゲルマン民族の civitas の住民は貴族 (nobiles) 自由人 (ingenuus) 奴隸 (serviles personae) との三つの階級から成っていた。普通ゲルマン人の自由 (Germanische Freiheit) の思想から原始ゲルマン人は皆自由平等であると思われ勝ちであるが, かかる自由は, 自由人の間に於ける法律的平等で, 社会的には貴族と普通の自由人と奴隸の三つの階級が原始時代から存在した。民会に於ても貴族は小事に関する決定権, 大事に関する先議権を持つている (Germania c. 11) Principes, rex dux, 等は皆貴族のうちから選ばれる。Tacitus Germania c. 7 において, „reges ex nobilitate, dux ex virtute sumunt” (王は門閥によつて, 將軍は勇氣によつて選ばれる) と云っている。原始ゲルマン民族の民会は, 偶然の突発事が起らぬ限り新月か満月の一定日に開催せられ, そこへ全自由民が武器をおびたまま集合して議事をすすめる (Germania c. 11. Coerunt, nisi quid fortuitum et subitum inciderit, certis diebus, cum aut inchoatur luna, aut impletur. Ut turbae placuit, considunt armati.) 而して Rex 又は Principes がその年功, 門閥, 戦功, 雄弁によつて傾聴せられる (Germania c. 11) のである。

ゲルマンの貴族は門閥から出るけれども, 戦功, 雄弁というのが如き個人的才能も重ぜられる。

更に Principes 又は rex, dux 等の指導者の外に下層貴族として従士階級 (comites, comitatus) がある。この comites は各々の civitas に於て Principes を補佐する為に百人会 (Centeni) を組織して居る。Tacitus は Germania c. 12 に於て „Cenetni singulis ex plebe comites concilium simul et auctoritas adsunt” (人民から選ばれたる百人の Comites があつて権威ある助言を以て補佐する) と言い, 又 Germania c. 6 においては “Centeni ex singulis pagus sunt; idque ipsum inter suos vocantur, et quod primo numero fuit, iam nomen et honor est. (各々の Pagus より選ばれたる Centeni は彼等の間ではその同じ名の百と呼ばれた。それは最初は数であつたが今では, 一の称呼となり, 名譽となつた) と云っている。この Centeni の母体である plebe と pagus は各れも civitas を意味する。

Principes は自己の周辺に多くの comites を集めてこれを扶養し、扈從であり傭兵である comites を率いて戦場に出た。彼等主從の関係は宗教的献身の誓によつて結ばれた。Tacitus は Germania c. 14 に於て „Jam vero infama in omnem vitam ac probrosum superstitem principi suo ex acie recessisse. Illum defendere, tueri, sua quoque fortia facta gloria eius assignare praecipuum sacramentum est.” (戦場を退いて Principes よりも生きのびることは (Comites にとつては) 真に生涯の恥辱であり不名誉である。Principes を守護し、これを掩護し、各々自分の勇敢なる行為をさえこれをその Principes の名誉に帰するのが彼等の特別の誓いである) と云っている。従つてこの宗教的誓約に違反するものは生涯に亘つて公民権を剝奪せられる。

又 Tacitus は Germania c. 13 において „Magnaue et comitum aemulatio, quibus primus Principem suum locus: et Principum qui plurimi et acerrimi comites. Haec dignitas, hac vires, magno semper electorum iuvenum globo circumdari, in pace decus, in bello praesidium. Nec solum in sua gente cuique, sed apud finitimas quoque civitates, id nomen ea gloria est, si numero ac virtute comitatus emineat. Expetuntur enim legationibus et muneribus ornantur et ipsa plerumque fama bella profligant.” (Principes の許において誰がその最大の愛顧を得るかの Comites の間における競争、及び誰が最も多数にして最も精鋭なる Comites を獲得するかの Principes の間における競争は大いなるものがあつた。常に選拔せられたる若者の偉大なる集団に圍繞せられることは、彼等の権威であり力である。平和の時における装飾であり戦争の時における堡壘である。己の Comites が数と勇氣において傑出することは Principes にとつては只に自国においてのみならず、近隣の国に対してさえも名誉であり光榮である。かかる Principes は各国からの使節によつて歓心を買われ、贈物によつて飾ざられ、かつ彼等の名声は屢々戦争をさえ阻止する) と云っている。

Principes はこの comitatus の集団を扶養する為に戦争を欲した。Tacitus は Germania c. 14 において „Magnumque comitatum non nisi vi belloque tueantur.” (力と戦争によるにあらざればこの大なる comitatus の群を扶養することは出来ない) と云っている。又 comites は自己の技倆を認めしめ頭角をあらわす為めには争乱を好んだ。若し彼等の奉仕する国が無事泰平に倦んだならば、戦を求めて他国に出かけた。

Tacitus は Germania, c. 14 において „Si civitas, in qua orti sunt, longa pace et otio torpeat; plerique nobilium adolescentium petunt ultro eas nationes, quae tum bellum aliquod gerunt, quia et ingrata genti quies, et facilius inter ancipitia clarescant.” (若し彼等の生国が平和と無為のために長らく麻痺せる場合、貴族の若者の多くは、何らかの戦争を行つて居る他国へ出かける。なんとなれば平和はこの部族にとつては喜ばれない。功名は騒乱のうちに立て易いからである) と云っている。

貴族は戦争によつて得た土地をその身分に応じて分配せられて大地主となり、下級貴族なる comites を扶養する。これらの貴族は衣服、髪容に於ても一般民衆と異つていた。Tacitus は Germania c. 17 において一般民衆は短い外套のほかは裸体であるが貴族は身体にびつたりと合う下着をつけて居ると云い、又 Germania c. 38 に於ては Suebi

の貴族は一般民衆と異なる特別の装飾を頭につけたと記している。

これらの貴族は平時において狩猟や睡眠に時を過して生産的労働は婦人や一般民衆に委ねた。一般民衆はこれらの貴族に家畜や穀物を献上してその必要をみたした。Tacitus は, *Germania*. c. 15 において „*Mos est civitatibus, ultro ac viritim conferre Principibus, vel armentorum, vel frugum, quod pro honore acceptum, etiam neccessitatibus subvenit.*” (彼等がその *Principes* に家畜又は穀物を自発的且つ個人的に与えるのは、彼等の国々の習慣である。これは儀礼的贈物として受取られるが、同時にその必要をみたすものである) と云っている。

かかる原始ゲルマン民族の貴族は一面世襲的でもあるが他面又一般自由民から新に補充せられて社会の均衡を保つ様に出来て居る。Tacitus は *Germania* c. 13 於て „*Insignis nobilitas, aut magna patrum merita, principis dignationem etiam adulescentulis assignant: ceteris robustioribus ac iam pridem probatis aggregantur. nec rubor inter comites aspicitur.*” (著名な貴族, 名門の出であるか又は父祖が大なる勲功のあつた場合は、青年に対しても *Principes* なる地位が与えられる。その他の一般の著者は年長にして強く已に試験済みの *comitatus* の群に加えられる。かかる *comites* の仲間に入ることを恥辱とは思わない) と云っている。

この *Germania* 第13章は原始ゲルマン民族の国家、社会組織を知る上に極めて重要である。彼等の社会には、一般民衆の自由が重ぜられるけれども同時に門閥とか父祖の勲功の如き貴族的要素も重ぜられた。たとえ若年であつても、著明の門閥の出であるとか父祖が国家に対して偉大なる勲功があつた場合には *Principes* の地位が与えられた。その他の若者はたとえ貴族の出であつても下級貴族である *comites* の群に投じ自分の勲功によつて *Principes* の地位が与えられるのを待った。 „*robustioribus ac iam pridem probatis*” は貴族の出身の者でなくとも強壯にして試練に合格し *comites* として下級貴族の列に加えられた者である。貴族的門閥の子弟がかかる下級貴族の列に加つても之れを恥としない。即ち *Principes* の地位も門閥の外に個人的方能によつても勝ち得られる。かくて原始ゲルマン民族の階級制には大いに融通性があり、Tacitus が *Germania* c. 7 に於て *rex* は門閥により、*dux* は勇気によつて選ばれる (*reges ex nobilitate duces ex virtute sumunt*) と云つた言葉が生きて来るのである。

German 民族がローマ国家社会へ侵入し、ローマの主権を倒してゲルマン国家を建設した時、その *Heerkönig* の勢力の中核は *comites* によつて組織せられた軍隊であつた。ゲルマンの国家がローマ文化及びカトリック教会の影響を受けてその王権が強化せられた時でもその貴族主義は亡びなかつた。Merowinger 時代の部族会議は古代ゲルマンの民会 (*concilium*) の延長であり、その決議の形式にも Tacitus の *Germania* c. 11 に記されて居る原型が踏襲されている。Lex Salica の序文には、 „この Lex Salica はフランク人民より選ばれたる4人の *Proceres* によつて起草せられ、貴族の集会に3回提示せられ、更に全人民より成る部族会議によつて議決せられた” と記している。*Proceres* (貴族) はローマ帝政の末期から現われる人民の代表たる地主的貴族である。これこそ原始ゲルマン時代に *comites* を率いた *Principes* の伝統の上に立つて居るものである。

(R. Sohm, Reichs-u. Gerichtsverfassung s. 51 ff 参照)。Augelsachsen 民族に就いて Beda は „Aethelbert 王は賢人会と共に法を制定した” (cum consilio sapientium constituit leges) と云っている。この consilio sapientium は所謂 Witenagemot で、人民の代表として参集した貴族の会議である。ここでも原始ゲルマンの Principes の伝統の継承が見られる。

Merowinger 朝に於ては511年の Clodovech の死後、国家の分裂と王権の衰微に乗じて貴族の勢力が拡大せられた。614年には Clothar II (584-626) は所謂 Magna charta libertatum と云われる勅令を發布して、僧職及び世俗の貴族の領土の拡大とその領内に於ける Immunität の権を認め、更に貴族が裁判所に於て人民を代表する権利等を認めた。かくして原始ゲルマン民族の Comites は徐々に Vasallen となり、Principes は諸侯となつて、中世化的封建化的傾向が進展して行つた。即ちこの Clothar II の勅令によつて新たな貴族が創造されたのでなく、原始ゲルマン的貴族が形を変え、中世化せられて来たのである。中世末期に於てフランスは益々ローマ化せられ、王権が強化せられ、その貴族は国王によつて任命せられた官僚貴族 (Dienstadel) によつて構成せられるが、独逸の領邦諸侯は原始ゲルマン的伝統を持つ世襲貴族 (Geburtsadel, Uradel) によつて構成せられた。

c. 一般自由民 (ingenuus or liberi)

原始ゲルマン民族の一般自由民は民会に出席して法律の制定に参与し、裁判に参加し又国民軍を組織して、ゲルマン軍隊の中核となつている。彼等は特別の突発事が起らぬ限り、新月か満月の一定時に民会に出席し、ここで principes, dux, rex を選出する。彼等は民会では武装したまま着席し、議案に賛成の時に framea を打ち合せ、不賛成の時は怒号を発する (Tacitus Germania C. 11)。大事に関して Principes は先議権を持つているが最後に之れを決定するのは一般自由民である。又同じ民会に於て裁判が行われる。一般自由民は之れに出席する権利と義務とを有する。Tacitus は Germania c. 12 において „Licet apud concilium accusare quoque et discrimen capitis intendere.”

(又議会において訟訴を起すことも死刑を宣告することも出来る) と云つて居る。この一般自由民がかかると公民権を行使するのは成年に達してからである。

Tacitus は Germania c. 13 於て „Tum in ipso concilio, vel principum aliquis, vel pater, vel propinquus, scuto frameaque iuvenem ornant. haec apud illos toga, hic primus iuventutis honos: ante hoc domus pars videntur, mox rei publicae.” (この同じ民会に於て Principes の或者又は父親又は近親者が、盾と framea をもつて青年を飾る。これが彼等にとつてはローマ人の toga に相当するもので、青年に対する最初の名譽である。これまで彼等はただ家庭の一員と看做されて居たが、今は国家の一員となつたのである) と云っている。即ち一般自由民は青年式の後国家の一員として公民権を与えられその権利が剝奪されない限り、国家の事業に参与する権利と義務とを持つのである。

この一般自由民は平時に於ていつも武器を携帯し、戦時には国家の為に凡て兵士として出征する権利と義務 (Waffenrecht) を持つている。Caesar は Bello Gallico IV, c. 1 に於て „Sueborum gens est longe maxima et bellicosissima omnium. hi centum pagos habere dicuntur, ex quibus quotannis singula milia armatorum bellandi causa suis

ex finibus educunt. religui qui domi manserunt, se atque illos alunt. hi rursus invicem anno post in armis sunt, illi domi remanent. Sic neque argi cultura nec ratio atque usus belli intermittitur. (Suebi 族は全 German 民族のうちで一番大きく最も好戦的な部族である。彼等は百の pagos を持つていると言われる。その各の pagos から毎年戦争の目的の為に千人の武装した兵士をその地域から送ることになっている。家に残った他の者は彼等自身と出征した者々とを扶養する。一年後彼等は再び交つて武器を執る。前に出征した者は家に留まる。かように農地の耕作も戦争の技術も又戦争の実際の行動も共に中断されることはない) と云っている。ゲルマン民族にあつては Caesar や Tacitus の時代から Karl 大帝の時代に至るまで自由農民によつて組織せられる歩兵がその軍隊の中核であつた。原始ゲルマン時代には Principes の周囲には Comites 如き職業的精鋭の戦士があり、後これが, Vasallen となつて封建時代の職業的戦士を形成するが然し Karl 大帝頃まではまだ, 歩兵の国軍民がゲルマン軍隊の中核をなしていた。かの H. Brunner は „Der Reiterdienst und die Anfänge des Lehenswesens” (1887) に於て, Karl Martel がアラビア騎兵の侵入軍を撃退する為にフランスに於ても騎兵を創設して, 土地 (Leihgut) を貸与し, Vasallität と Benefizialwesen とを結合した。ここに封建制度が発生したと云つて居る。これに対して Roloff は „Die Umwandlung der, fränkische Heer von Chlodweg bis Karl der Große (1902) に於て, 騎兵を主体となす回教軍を撃退したのは騎兵軍でなくして歩兵軍である。古代のギリシアから近代のスイスに至るまで騎兵に対して勝利を得る可能性のあるのは歩兵である。八世紀のフランスに於ても自由農民から成る歩兵隊が存在したと述べている。又 H. Fehr は „Das Waffenrecht der Bauern im Mittelalter (1914) に於てフランク国に於ては8世紀に於ても貧しい小農が引きつづいて軍隊に召集せられている。当時の Kapitularien には国民軍なる文字が屢々現われるが, これは農民を含めた全国民から成る軍隊で, 封建的家臣のみから成る Vasallen の軍隊ではないと云っている。更に St. Galen の Mönch の著した Gesta Karoli Magni には Karl 大帝は 774 年に Langobarden を征する為にアルペンを越えて率いた軍隊を大帝自ら exercitus popularium de latissimo imperio congregatum (広大なる帝国から召集した国民軍) と云っている。これによつても彼の軍隊が封建的 Vasallen のみによる軍隊でないことが明かである。(Dopsch, Grundlagen II, 301 ff 参照)

この国民軍を組織する原始ゲルマン民族の自由なる農民は各れも皆平等に I Hube を標準とする一定の広さの土地を所存して居り, 彼等の経済的不平等の現われたのは八世紀頃からであると初期の Germanisten は主張する。然しゲルマンは Tacitus の時代から已に不平等であつた。たとえ戦争によつて占領した土地は一時平等的に共同耕作せられることがあつてもやがてその身分に応じて分配せられる。Tacitus は Germania c. 26 に於て Secundum dignationem によつて土地は分配せられると云つて居る。rex, principes は広大なる土地を所有し, その部下に戦功に応じて土地を与えた。殊に Völkerwanderung により, ゲルマンの rex は, ローマ皇帝の直轄領を没収して, 部下に対する土地贈与を行つからこの傾向は益々助長せられた。

当時自由民のうちには, Gregor von Tours のフランク史(Hist. Franc. IV c. 12)によ

れば, maiores, mediocres, minores, minimi 等の差別があつた。又 Lex Burgundionum によれば, optimates, mediocres, minores, inferiores 等の差別があつた。Maiores, Optimates は大地主で, mediocres は中間の小地主, minores, minimi 又は inferiores は小農である。この区別は民族大移動後の文献によるものであるが Tacitus 当時にも程度の差こそあり大体かかる身分の区別は存在したと思われる。Langobarden 王の Rothari (630-652) の発令した Edict Rothari の第14条, 第48条には Wergeld は „in angargathungi” によつて決定せられると規定せられ, 且つこれは „secundum qualitatem personae” の意味だと註釈されている。即ち人物の評価をその所有地の広さによつて決めている。angar-gathungi は耕地の大きさを意味する。これによつても土地所有の差別は Karolinger 時代よりも遙か以前から存在したことが窺われる。

中世に於てはこれらの小農は大地主と保護関係 (patrocinium) に入つた。この保護関係に入ることによつて, 地主 (Potentes) は, 小作人を代表して裁判に出席し, その代理権によつて小作人を不正なる裁判から保護し, 且つ小作人の裁判に出席する手数をばぶいた。又官吏が公権を濫用して過重に軍役に徴発することから小作人を保護した。又自己の身体を抵当として保護関係に入つた犯罪者のために Wergeld を支払い身請によつてその生命を救つた。又生計の資に窮せる pauperes を保護関係に入れ之れに適當なる仕事を与えた。この patrocinium は中世初期の混乱期に小農を救済する一の社会制度であつた。westgoten ではかかる Patrocinium 入つた人を bucellarius と云つた。これは Brotesser の意で, 彼が被護人となつてはじめて食を得たことを意味する。且つ保護関係に入ることとはその自由を失うことではなく, 地主の待遇が意に満たなければ自由にその地主の許を去つて他の地主と保護関係に入ることが出来た。然るに封建制度化が進むに従つてこの Patrocinium はその本来の意義を失ひその身分が固定するに至つた。

又ゲルマンの国民兵は無給で, 装備も自弁であつたから, 経済上の分化から Waffenrecht に於ても階級的分化をもたらした。他人の援助をまつて初めて装備して軍役にすることが可能な自由人は社会的にも劣等視せられ, 法律的にも下位に立つた。之れに反して自らは重騎兵として出陣するのみならず, 経済的に薄弱な人々を武装せしめて自己の部下たらしめる人は, 偉大なる声望を得た。これが大地主である。Greger von tours は Hist Franc. X c. 9 に於て, フランクの軍隊が川を越える時はその困難さは, robustiores, inferiores, pauperes に於て差別があつたと云つている。即ち富める者は重武装し貧しい者は軽装であるからである。かくしてローマの末期頃から豪族が私兵を蓄える風が益々盛んとなつた。これが所謂封建化運動の現われの一であつて, Arnulfinger が Merowinginger 家から王位を篡奪したのもこの私兵の力によるものである。

d. 奴隸と解放奴隸 (Servi & liberti, 又 libertini)

自由を尊ぶ原始ゲルマン民族にも奴隸なる階級があつた。彼等は基本的人権が認められず, 生命財産に損害を受けても Wergeld を請求する権利がなく移住の自由も持たない。この Germanen の奴隸は Tacitus によると二種類に分れている。

第一は, 元来自由人であつたが, 自らの過失か事業の失敗から自由を喪つて奴隸となつたもの, 第2は Rome の Kolonen の如く身分的には小作人の如く土地に束拘せられて

生活しているものである。

Tacitus は第一の場合の例として、賭博で、自由をかけ、失敗の結果他人の奴隷となる場合をあげている。Tacitus は *Germania* c.24 において „Aleam (quod mirere) sobrii inter seria exercent, tanta lucrandi perdendive temeritate, ut cum omnia defecerunt, extremo ac novissimo iacta de libertate et de corpore contendunt. Victus voluntariam servitutem adit. quanvis iuvenior, quamvis rubustior alligari se ac venire patitur. ea est in re prava pervicacia: ipsi fidem vocant. Servos conditionis huius per commercia tradunt, ut se quoque pudore victoriae exsolvant. (誠に不思議なことであるが、彼等は賭博を真面目な仕事の如くに行い、勝負に向う見ずで、凡てを失った場合、最後には、自分の自由と身体を賭けて争う。負ければ自ら進んで他人の奴隷となり、たといより若くより強くとも自ら束縛を受け奴隷となることを甘受する。悪事における歪められたる頑固さはかくの如きものである。これを彼等には仁義 (fides) と呼んでいる。かかる運命によつて得られたる奴隷は、勝つた者も羞恥の念から解放せられん為めに取引を通して売り払つてしまう) と云っている。かくの如くにして自由人から奴隷に転落した人もあつたであろう。この外他人を傷け *Wergell* を支払うことが出来ずして奴隷になつたもの、又借財を支払うことが出来ずして奴隷となつた者等、種々の事情で自由人から奴隷になる人があつた。

第二に小作人に類似した奴隷の例として、Tacitus は *Germania* c.25 において „*Ceteris servis. non in nostrum morem, descriptis per familiam ministeriis, utuntur. Suam quisque sedem, suos penates regit. Frumenti modum dominus, aut pecoris, aut vestis, ut colono iniungit: et servus hactenus paret. Cetera domus officia uxor ac liberi exequentur*, (その他の奴隷は吾々 (ローマ) の習慣の如く家庭の仕事を割当てて使用しない。彼等は各々自分の居所と家庭を持つている。主人は吾々が小作人に対する如くその奴隷に一定量の穀物、家畜、織物を課する。奴隷はこの程度の服従をなすに止まる。その他の家の仕事は妻や子供が行う) と云っている。*German* の大部分の奴隷はこの種の *laeti* と云わるる中世の *Serfs* と似たものであつた。彼等は一定の土地に住み、独立の家計を営みその身分は世襲的で、移住の自由はない。彼等は *Germanen* の法律に従つて生活し、一定の小作料を支払つている。ゲルマン人がローマと交渉を持ち、多くのゲルマン人がローマの軍役につく様になつた3世紀に於てはこの種のゲルマンの *laeti* もローマ軍役につき皇帝から *terra laeticae* と呼ばれる土地を貰つた。ローマの社会でかかる地代を払つて一定の土地に住んで居る農民は *coloni* と呼ばれた。又 *Germanen* の *laeti* はゲルマンの *rex* 又は *Principes* からもローマ人の所謂 *beneficium* なる土地を貰い、小作権を強化して行つた。従つてゲルマンの *laeti* は *Halbfreie* でその数は *Merowinger* 時代から *Karolinger* 時代にかけて益々多くなつた。地主は *servi* に土地を与え之を *laeti* として向上の希望をもたせ、これを荒廃地の開拓に使用し、奴隷解放を通して経済的發展を促進した。更にこの *laeti* が益々経済的に有力となり、主人から自由を買いとつて完全なる自由人となるものが多かつた。教会はその信者に多くの *servi* や *laeti* を持つて居たからかかる解放事業を奨励し、教会組織の中へ彼等を吸収

して保護を与えた。

かかる解放奴隷は已に Tacitus の時代から現われている。Tacitus は Germania c. 25 において „Libertini non multum super servos sunt, raro aliquod momentum in domo, numquam in civitate; exceptis dumtaxat iis gentibus, quae regnantur. ibi enim et super ingenuos et super nobiles ascendunt: apud ceteros impares libertini libertatis argumentum sunt. (解放奴隷は、一般の奴隷より余り著しく上位に置かれて居ない。稀に家庭において重要視せられるが、国家においてはかかることはない。只王政の行われて居る部族(国家)は例外である。そこでは解放奴隷は自由民や貴族の上にさえものぼることがある。他のゲルマン族にあつて解放奴隷が劣つて居るのは自由の証拠でもある)と云つて

いる。

ゲルマン民族にあつては Tacitus の時代においても、自由民から奴隷になるものと、奴隷から解放せられて、Halbfeie となり、更に一般の自由民となるものがあつた。殊に王政の行われて居る部族にあつては解放奴隷は自由民又は貴族の上にのぼることがあると Tacitus は云つている。これは Tacitus の時代に於ても国王は側近召使即ち Königsdienst として普通の貴族よりも解放奴隷を重視しこれを信頼したからである。Merowinger 時代にあつてはかかる解放奴隷より成る側近貴族は、Pueri regis, 又はゲルマン語で Sakebaro と呼ばれ非常に大きい勢力を持っていた。彼等は国家の政治の枢機に参画し国王の ministerium を作つた。ministerium には管理者と云う意味と奴僕と云う二つの意味がある。後世の minister はここに起原を發する。Merowinger 朝の国王は彼と利害が相反し常に国王に反抗的な門閥貴族を抑える為めにこの解放奴隷を側近貴族に採用するを常とした。かの Neustrien の Majordomus にあげられた Ebrein (+681) もかかる liberti から身を起した一人で、従つて門閥貴族の反感を買い、彼等から miles quidem iniquissimus Ebrein... ex infimo genere ortus (Acta s. Ragneberti) (微賤の階級から身を起したる不公平極まる王の兵卒たる Ebrein) 輕侮せられた。然しこの解放奴隷は益々その数を増し一つの社会的階級として共同の利益を持ち王の側近貴族や一般自由民となつて、歴史の舞台からその階級的な姿を消すのである。

II 原始ゲルマン民族の法律思想

原始ゲルマン民族の法律思想は彼等の特性である正義と自由の思想を根幹としている。この正義と自由の思想によつて、国家は個人に対し Gemeinfriede を確保し、各個人の名誉、身体、財産の安全を保障し、若しそれが侵害された場合には、賠償を得さしめねばならない。又各個人は国家の公の裁判を受ける権利を持つて居る。次に個人と個人との場合に於ては、ゲルマンの自由人は、彼が意思と力とを持つて居る限り、如何なる場合に於ても自己の意思によつて決定出来る。ゲルマン人の腕はただ相手のより強い腕によつてのみ征服せられる。国家の権力によつて抑制せられない。

かかるゲルマン人の優越せる自由は私法的には Fehderecht なる語を以つて表現せられる権利を自由人に認める。これは自然がゲルマンの自由人のみに与えた、ゲルマン人

の自由の産物である。この Fehderecht を主張し得るのは当事者及びその血族が、身体、名誉、財産に損害を受け、特に刑法上の事件として取扱われる場合で、その他の場合には裁判を受けなければならない。

ゲルマン人の裁判は毎年一定時に即ち満月か新月の時に、全自由民が集まる民会 (concilium) に於て行われる。この人民裁判を彼等は Ding と呼んでいた。この同じ民会に於て principes, rex 及び dux も選ばれる。全自由民はこの裁判に出席する権利と義務を持っていた。

ゲルマン人の刑罰について Tacitus は Germania c. 12 において „Distinctio poenarum ex delicto. proditores et transfugas arboribus suspendunt: ignavos et inbelles et corpore infames coeno ac palude, iniecta insuper crate, mergunt. Diversitas supplicii illuc respicit, tamquam scelera ostendi oporteat, dum puniuntur, flagitia abscondi. Sed et levioribus delictis, pro modo, poena. equorum pecorumque numero convicti multantur.

(刑罰は犯罪によつて相違がある。叛逆者、脱走者は木に懸けられ、卑怯者、戦争忌避者及び破廉恥罪を犯せる者は簀子 (すのこ) をかむせて泥沢に沈める。刑罰の相違は、極悪は見せしめにし、破廉恥行為は隠蔽すべきであるとの配慮による。軽罪に対してもそれ相応の処罰がある。有罪の宣告を受けた者は、馬や家畜によつて罰金を支払わねばならない) と云っている。個人が全国民を裏切る様な場合は又は破廉恥罪を犯す時はその民族から根絶せられる。

Fehderecht は現代の刑法権に相当するもので被害者はその血族と共に加害者を死に至らしめるか、勝利を得て思う存分に賠償せしめるか、或いは加害者が反抗の力によつて全々刑罰を免かれるかの各れかに終るのである。氏族制度のもとにあつた原始ゲルマンの家族は、防禦又は復讐の為めの血につながる団結であつて、一の家族は一の民族に類似する点を持つている。従つて Fehderecht は一の民族法の色彩を持つている。Tacitus は Germania c. 21 において “Suscipere tam inimicitias, seu patris, seu propinqui, quam amicitias, necesse est.” (父又は親戚の者の敵意はその友情と同様に是非引継がねばならぬ) と云っている。原始ゲルマン族にあつては個性的な人格がまだ発達せず、各人は血縁の一人として行動せねばならなかつた。然しかかる Fehde が繰り返される場合若し正義は力である、正しい者が必ず勝つと云う伝統的な民族精神が無ければ、ゲルマン民族はとつとに亡び去つていたかも知れない。彼等が益々発展して今日に至つてゐるのは正義が力であるとの堅い道義的精神が彼等を拘束していたからである。Tacitus は Germania c. 19 において „Plusque ibi boni mores valent, quam alibi bonae leges.” (そこでは良き風習が他所の良き法律よりも力を持つて居る) と云つて居る。この良き風習こそ German 民族存続の根柢であつて、これなくしては Fehde も有害無益であつたであらう。歴史家 Tacitus は慧眼にもここに着眼している。実にこの一句こそ、Germania 46章の解釈の一のキポイントである。

更に原始ゲルマン民族には Fehde を緩和する制度として Compositionenrecht (和解権) がある。これは被害者が加害者から Wergeld (賠償金) をとつて和解する制度でゲルマン人の自由の制約である。Tacitus は Germania c. 21 において „Luitur enim etiam

homicidium certo armentorum ac pecorum numero, recipitque satisfactionem universa domus”（殺人でさえも牛や羊等の家畜の一定の数によつて賠償せられる。全家族はこの賠償を受取る）と云っている。この compositionenrecht を持つものは Fehderecht を持つ自由人のみで、奴隷にはこの権利がない。奴隷を殺した場合、加害者が Wergeld を支払うのは奴隷の所有者たる主人に対しその損害を賠償するので、殺されたる奴隷の子供やその血縁のものに賠償するのではない。又受けた損害に対して Fehde をなすか或は composition によつて穩便にことをすますかは自由人たる被害者の自由に一任せられる。然し過失によつて他人に損害を与へたる場合、加害者が composition を申出た時には Fehde は許されない。更に Wergeld を要求する権利を持つてゐるのは、ゲルマン人のみで、ローマ人にはこの権利がない。それはローマ人には Fehderecht が無いからである。

被害者によつて請求せられる Wergeld の額はその被害者の持つ Fehderecht の強弱によつて決まる。より大なる自由を持つて居る者はより多額の Wergeld を要求することが出来る。即ち多くの Comites を扶養する Principes は Fehde に於ても大きい力を持つてゐるからより多額の Wergeld を要求することが出来る。更にこの Wergeld の多寡を決定する人物の評価即ちその人の持つ自由の大小は徐々にその人の所有する土地の広狭によつて決定される様になつた。已に Tacitus の時代でも土地はその人の身分 (Secundum dignationem) によつて分配せられる (Germania c. 26) と記されている。この傾向は中世に於て益々顕著となつて行つた。Langobarden 法によると Wergeld は angargathungi によると 規定せられて居る (Brunner. D.R.G. S. 131), この Angargathungi は Angergröße (耕地の広さ) である。Angargathungi によると云うことは, Secundum qualitatem personae (人物の地位による) と同意語である。Wergeld は大体階級によつて一定しているが同じ階級に於てもその人の持つ財産の大小によつて差別がつけられたのである。

この和解によつて支払われる Wergeld の一部は国王に帰納せられる。Tacitus は Germania c. 12 において „Pars multae regi, vel civitati, pars ipsi, qui vindicatur, vel propinquis eius exsolvitur” (賠償金の一部は国王又は国に、一部は被害者自身又はその近親者に支払われる) と云っている。この国王に帰属する賠償金はフランク法では freidus と云われる。これは Friede の意味で、現代法の所謂 Friedensgeld である。国王はこの賠償金を受領してその賠償金を支払つた者に平和を保障するのである。国王は国民の Volksfrieden (一般平和) を護る義務から犯罪に対して原告の立場をとるので、キリスト教時代に国王が Landfrieden (公安) の責任者であつたことの起原は已に原始ゲルマン時代に発している。即ちゲルマン民族は法律的に高い思想水準にあつたことが知られる。

原始ゲルマン民族が殺人に対しても賠償によつて和解したことは現代人から見れば一寸奇異の感があるが、それは殺人に対する思想が根本的に現代人と異つていたからである。原始ゲルマン人にとっては殺人そのものは罪惡でなく、只殺人行為が彼等の社会道徳に反してなされた場合に限り罪惡とせられた。賠償の権利を持つ者が、姦通者、強姦

者を即座に殺しても罪とはならない。原始ゲルマン人にとって最も重い罰は破廉恥罪, Sippe に対する誓約, 即ち *civitas* 共同体の規約に反する罪であつた。

彼等がキリスト教化せられてから, キリスト教の生命尊重の精神, キリストの聖愛の精神によつて, 殺人そのものが罪惡とせられる様になつた。理由の如何にかかわらず殺人犯に対しては, 国家は侵害されたる正義の名において告訴を提起し, 殺人犯人を公権剝奪, 一定期間又は生涯の追放に処した。然し異教的思想が深く根をおろしている German 人は悪人を懲らしめるために殺人罪を犯した様な人に対して之れを庇護し, これに宿舎を提供した。教会も Asylrecht によつて一定期間これを保護した。然し主人を殺した者, 共同体の契約に逆いた者, 教会又は神を侮辱した者は無条件の追放に処せられた。かかる無条件の追放に処せられた者をゲルマン語では *warg* に処せられた者と言つた。*warg* は Latin 語の *arg*に通ずる文字で, Got 語では十字架にけることを *gawargjan* と云つた。又中世のキリスト教会は *Fehde* の繰返しを防止する為に *Friedenkirche* の制度を設け, 殺人犯人がその近親者につき添われてこの *Friedenkirche* 内へ逃げ込めば, 40日を限りてその安全が保障せられた。40日後は *banda* と称せられる三の村とその附近の森で安全が保障せられた。又贖罪の為に外国へ巡礼する者にも安全が保障せられた。かくしてキリスト教化せられたゲルマン人は徐々に *Fehde* や *Wiking* の海賊行為を禁じた, 又1225年に起草せられたる *Westgoten* の法律には, 洗礼を受けた子供のみが親の財産を相続し得るとか, 誰でも教会へその財産を遺贈出来るという様な規定が条文として加えられた。又教会の祭日或は一週のある特定日にはゲルマンの自由人も武器の携帯を禁ぜられた。

原始ゲルマン民族は善良, 寛大, 正直で心から友を愛した。然し同時に彼等は敵を憎み, 復讐を好んだ。このゲルマンが敵をも愛するキリストの聖愛を身につけるためには多くのことを中世のカトリック教会から学ばねばならなかつた。Kaiser Heinrich III (1039-1056) は中世に於て最も早くかかる理想に近づいたゲルマン人の王であつた。彼は Cluny 風の精神を身につけた熱心なる信者で, 1043年の Konstanz の宗教会議に於ては説教壇から一般民衆に平和の勧告を行い, 彼に対する凡ての責務を赦免した。1044年のハンガリ戦争勝利の大感謝祭には一般的債務の赦免を行つた。かくして彼の治世のもとで漸く Germanentum と Christentum の結合が行われて来た。これは実にゲルマン史の一の転換期である。

SUMMARY

A Research about the Political Structure and Law
Conception of Urgermans

Kumazo MIKITA

Urgermans had no state in the modern sense of the word. Caesar said in his "De Bello Gallico" VI, 23,

"In peace there is no common magistrate, but principes of provinces and cantons administer justice and determine controversies among their own people. When a "civitas" either defends itself in a war urged against it, or urges a war against another, the magistraate is chosen to preside over that war with such authority that they have power of life and death.

In Germany coexisted monarchies and republics. This juxtaposition of monarchies and republics was based on the distinction made between their chiefs. If their chiefs were "reges", their states were called "monarchies", and if their chiefs were "principes", their states were called republics, and both of them were very democratic systems. Tacitus says in his "Germania" c. 7, "nec regibus infinita aut libera potestas". Even in monarchical states a general peace was not a royal peace but a folk-peace.

Peoples of the German states consisted of three classes, honoratior personae (of nobiles), ingenuus and serviles personae. German nobiles were composed of superior "principes" or "reges" and inferior "comites. "Ingenuus (liberi)" were the core of German infantry from earlier days to the days of Charles the Great. "Serviles personae" were divided in two classes, "laeti" (or "coloni") and slaves. "Laeti" were half-free, and "servi" were not free.

German Law is the product of their justice and freedom, and this spirit expressed itself in their system of "Fehde right" and "Compositionen right". And this system was based upon their social moral that "Justice is Power".

Tacitus says in his "Germania" c. 19, "plusque ibi boni mores valent, quam alibi bonae leges".